

## 特別優秀賞

### 残っているたい焼きの重み

香川県 東部小学校 五年 佐藤紀代

去年、わたしが四年生のときの登校中のできごとです。家を出るときに、その声が聞こえてきました。

「紀代ちゃん！誰かたおれてる！」

その声は、近所の五年生の友達でした。

表へ出ると、近所の一人ぐらしのおじいさんが、ゴミ捨て場でたおれていました。横には電動車いすがひっくり返っていて、おじいさんのおでこや手から血が出ていました。

わたしたちは三人で起こそうとしましたが、小がらとはいえ、おじいさんの体は重く無理でした。友達がおじいさんに声をかけ、わたしはお母さんをすぐに呼びにいきました。

「紀代、家からタオルを取ってきて！」

と、言われて取りにいく間、わたしは下を向いてかくれて泣いてしまいました。一年前に亡くなった祖父のことを思い出したからです。でも、今は泣いているひまはないと自分に言い聞かせて、ぐっとなみだをがまんしました。悲しみをこらえて、今わたしができることをしっかりすすんでしなければ、と思いました。

お母さんは、体や服が血でよごれるのも気にせず、おじいさんに声をかけ続け、わたしたち三人が起こした電動車いすに、抱きかかえたおじいさんを乗せました。

近所の人たちもきてくれたので、わたしたちはホッとして学校へいきましたが、学校でも不安な気持ちは続いて、ずっとドキドキしていました。学校から帰って、おじいさんは大丈夫だったことを聞くまで、心配な気持ちが続いていました。また大切なおじいさんが、一人いなくなったらどうしよう……と、こわかったです。

わたしの祖父は、今から二年前に亡くなりました。ずっと入退院をくり返し、しせつや病院をいったりきたりしながらすごしました。病院から電話がかかると、夜中でも病院へ行きました。不安なとき、こわいとき、悲しいときは祖父の手をつつみこむようににぎってあげました。

そんなこともすっかりわすれていた今年の春。いつものようにおじいさんが、車いすで散歩から帰ってきました。

「あのときはありがとう。ずっとお礼を言いたかった。ありがとう、ありがとう。」

と、言ってわたしの手にずっしりと重くてホカホカのたい焼きを乗せてくれました。わたしは、がまんできずに泣いてしまいました。

何かをもらいたくて助けたわけではなく、おじいさんが好きだから力になりたかっただけだし、自然と体が動いただけです。わたしはたい焼きをお母さんに渡し、おじいさんの手を強くにぎりしめました。わたしの祖父と同じ手のぬくもりを感じ、おじいさんを通して祖父の姿が目にかびました。たい焼きは友達とわけましたが、いつもとはちがう温かみとあまさがありました。祖父とすごした時間があつたからこそ、誰にでもやさしくできる心をもてたのだと思っています。